

神愛子

The Child Loved
by God

に愛された

鈴木カタル

Suzuki Kataru

Illustration: 沖史慈 宴

主な登場人物

Main Characters

アルフォンス

リーンの父親で、
ルーナという地の領主。
現国王の四男。

レイルス

リーンの母親。
いつもにこにこしている、
穏やかな人物。

リーン

善行を重ね、日本から
転生した本編の主人公。
神の祝福によって
特別な姿と力を得る。

ジールフィア

リーンの祖父で
アルベスピア王国の国王。
凄腕の魔法使いだが、
面倒臭がり。

カールベニット

老け顔の優秀な魔法師。
リーンの家庭教師を務める。

イピリア

大気を司る聖獣。
森の奥で暮らしていた
ところを人間に
発見され……。

アクリス

生物を司る聖獣。
ある事件で
リーンの前に現れる。

神の世界に、一つの「純白」な魂が流れてきた。

その魂の白さに、神は驚く。

そつと手にして魂を見詰めると、生前の様子が窺えた。

この魂の持ち主は、日に何度も困っている人に手を差し伸べていたらしい。

一つ一つは小さな事でも、ちりも積もれば何とやら……とは、よく言ったものである。

この魂は地球で生まれ、その生を終えた。

八十近くまで生きていたのだから、相当長い間善行をしていたのだろう。

人は欲望のままに生き、その欲望で己が身の内へ穢れを溜めるものだ。

穢れの無い魂を保つなど、余程の事が無い限り不可能なはずなのだが……

なれどこの魂は「純白」である。

神は魂を見て、ふと考えた。

この魂ならば、やがて【神】になれるだろう。

だが、どうしたものか……神はこの純白の魂の処遇に悩んだ。
そして熟考の末に、ある世界へ送る事に決めた。

神が創り出した世界は数多あるが、その中に魔法を使える世界がある。

地球には無かった力を、この魂はどう使うのか……それを見てもみるのも良いだろう。

手の内にある魂にそっと口付けをし、両手を広げ送り出す。

おぎゃあ、おぎゃあ……

この日、アルペスピア王国に、一つの新しい命が生まれた。

これこそ、神が送り出した純白の魂を宿している命だ。

神には一人の女性が、愛おしそうに赤子を抱えている姿が見えた。

さて、その純白の魂が本物なのかどうか……

この世界でどう生きるのか、神は行く末を見守る事にした。

+

太陽の光が差し込む部屋の中で、心地よい声が僕に降り注ぐ。

「今日も一緒に勉強をしようね、リーン」

そう言ったのは僕の兄だ。彼が呼んだ「リーン」とは、僕の名前。彼が家族の中で一番多く、僕の名前を呼んでくれるのだが、毎日、何度も何度も呼びかけられたお陰で、自分がリーンという名前なのだと気が付けた。

彼は目尻^{めじり}を下げ、穏やかな声で話しかけてくれる。僕の兄は、声だけでなく、性格もとても優しいらしい。

繰り返し呼ばれるまで自分がリーンだと気が付かなかったのは、僕に前世の記憶があったからだ。僕は、この世界に生まれてくる前の記憶を持っている。と言っても、断片的なもので、はっきりはしていないんだけど。しかも、今はリーンとして見聞きした事も記憶しているせいかな……今自分がどちらの世界に居るのか、分からなくなってしまう事があった。

その度に僕は、言葉にならない音を発するものの、傍から見れば赤ん坊が「あーあー」と言っているだけなので、当然、家族には何も伝わらない。

頭の中で「ここは何処^{どこ}？」と話しているのに、出た言葉は「うー」だけだったりする。

そうやって三年の日々を過ごし、家族の会話を耳にしている内に、この世界の言葉を自然と理解していった。

今はもう、聞けば内容は理解出来る。だけど、まだ上手に話せない。頭では分かっているけど、実

際に話すとすると、別次元の難しさだ。この世界で日本語が使われていたら、楽に話せたのに。そんな僕に、兄は沢山話しかけてくれて、僕は色々な事を知れた。ここが異世界で、僕が転生者だって事も、最近理解出来た。そして今もまた、彼は僕に本の読み聞かせをしてくれるようだ。

+

広い机の上に書物を置き、僕はそれを広げて弟のリーンオルゴットに読み聞かせる。

アルペスピア王国は「賢王」が居た国として有名であり、『魔法』発祥の地としても知られている。

広い領土に、森や山があり、海に面している所もある。

魔法が発達したお陰で、他国と比べて豊かな国だ。

各領地には教会が必ずあり、教会では「神は人の傍に在り」「日々の暮らしに、魔法に感謝を」と説いている。

ここに表される神は神であり、名前はない。この世界をお創りになった御方である。

「と、教会では、残された書物からそう説いている」

「くみ、しゃ、まあ？」

机の上の書物に向かって首を傾げ、独り言のように拙く呟く僕の弟。

その可愛らしさに全身が震える……

僕の弟は、白に近い銀色のくせ毛に、深い青色の瞳、それに加えてプルプルな白い頬を持つ。

フニフニした小さな手足で、膝の上に乗っている弟は、僕の言葉を繰り返した。

言葉をまだちゃんと喋れず、その口調はたどたどしい。妹が同じ年頃だった時より、言葉の習得がゆっくりでちよつと心配だけど、こうやって一緒に居ると、そんな事はどうでも良くなる。

見た目もさることながら、仕事がとても愛らしい。

僕の弟として生まれてくれた事に、本当に感謝してもしきれない。

この可愛い弟と過ごせる日々は、生涯で一番の宝物になるだろうと思っている。

将来も楽しみなこの可愛さに、これから何度悶絶する事になるのだろうか。

僕は、もう一度弟に言い聞かせる。

「ふふ。神様ね」

「くみしゃら……」

「か、み、さ、ま、だよ。リーン」

「か……んんん、みしゃま！」

言いきった感を露わにして、微笑みを見せる弟。

どうにも言い表せない可愛さに、僕は口元を押さえて身悶える。

このリーンオルゴット……リーンが生まれてくる時は、本当に大変だったんだ。

母様の体力もギリギリで、母子共に駄目かもしれない……と、薬師達が言っていた。

僕は自分の無力さがやるせなくなつて……母様の傍に居た父様の、不安そうなお顔を見る度に涙が溢れてしまった。

難産^{なんだん}だったから、リーンが生まれた瞬間、僕は宝物を見付けたように「わぁ！」と声を出して喜んだ。

母様の苦しみや、父様の不安そうなお顔も忘れてしまうくらいの感動だったんだ。

そんな弟は、今三歳になった。

僕は少しでも長くリーンと一緒に居たくて、勉強しながら膝の上で抱っこするのが最近の日課になつている。

フワフワとした髪の毛に頬^ほ擦^おりしながら、そつと抱きかかえると、リーンは青い目を細めて「にいたま」と言つて微笑んでくれる。

僕に弟という天使をくれた神様に感謝したい。

頑張つたのは母様なので、僕にプレゼントしてくれた訳ではないと思うけれども……

可愛いリーンを膝に乗せたまま、僕は別の書物を広げた。

「神様はね、世界が創られた頃には、そこに住んでいたようなんだよ」

「う……？」

「僕の好きな、この『世界創生と魔法について』にはこう書かれているんだ」

世界が創られた頃、神は人の傍に居ました。神の少しの慈悲^{じひ}から人に自我^{じが}が芽生^めえ、やがて欲望^{きようぼ}が生まれます。

欲望^{きようぼ}塗れになる人々に神は心を痛め、人とは哀れなる生き物だと嘆きました。

そして手を差し伸べる慈悲を無くし、神は人の傍から消えてしまったのです。

一つの国の王が、人々の傍から神がいなくなっている事に気が付き、神から見放されたのだと理解しました。

神がいなくても人が人として生きていける世にすべく、国王は自ら民の為に手を尽くしました。やがてその王は人々から「賢王」と呼ばれるようになったのです。

神を失くした世界は酷く荒れていました。

賢王は苦しみながらも知恵を生かし、人々の為にと懸命に政治を行います。

賢王の尽力^{じしんりき}で、少しずつ安定した生活を送れるようになった人々は、やがて賢王に感謝し始めました。

人々の支持を得た賢王は、また神に会えるようにと、人々に「祈り」を広めます。

賢王と人々の祈りに、神は少しだけ心を癒^いされました。そして、賢王の命と引き換えに、人々に

魔法を授けたのです。

魔法を使うようになり、人々の暮らしは以前よりも良くなりました。

そして魔法と引き換えに生を終えた賢王の事を【魔法神】と崇め、魔法に祈りを込め、感謝して日々を過ごします。

「やがて……賢王の居た国、アルペスピア王国から世界中へ魔法が広がっていったのです。ってね？　今はもう居ないけれども、この世界には神や賢王が居たんだ。それが分かるのも、こうやって書物が残っているからだよねえ」

「う！」

リーンにはまだ理解出来ないだろうけど、僕はこの話が好きだ。好きな話をリーンにも知って欲しい。

それが伝わったのかは分からないけれども、ニコニコと微笑むリーンは、僕が好きなこの書物を手で触って遊んでいた。

†

「……レーモンド兄様ったら、私のリーンに」

扉の隙間から覗きながら、私は歯をギリギリと噛み締めた。

部屋の中でデレデレと緩んだ顔を晒す兄様へ、じつとりとした視線を送る。

「私のリーン……」

ポソツと呟くと、部屋の中に居たリーンと視線が合った気がして、ハツとした。

もう兄様の独り占めは我慢出来ない！

——バーン！

大きな音を立てて扉を開け、スタスタと机の方へ歩いて行くと、私に気が付いた兄様がアワアワと慌て出す。顔をそむけ、視線を合わせようとしない。

そんな時でも、私の弟リーンオルゴットは、フワツと微笑みながら私の事を見ている。

その美しい瞳を向けられるだけで、心の中を見透かされているような気がするわ。

「ヴァイラ……」

「レーモンド兄様の時間は、終わりですわ」

サツと弟を奪うと、兄様が「ああ！」と小さく叫ぶ。

情けない声に、私はクスリと笑った。

「お勉強、頑張ってくださいませ」と告げて、そのまま中庭までリーンを抱っこして歩いて行く。途中からは腕が疲れてしまったので弟を降ろし、手を繋いで二人で仲良くゆっくりと歩いた。

「リーン？」

「ふあーい？」

名前を呼ぶと、歩く事に集中しているからか、いつもより少し気の抜けた声で返事をくれた。そんな返事でも、とても嬉しくなるの。

私が十歳で、リーンは三歳。

少し歳の離れた弟は、本当に可愛いものだわ。

「可愛い」の一言では言い表せないんですけどね！

中庭に着くと、木陰にセットされたテーブル席に母様が座っていた。

美味しそうに紅茶を飲んでいる。

母様に気が付いたリーンは、両手を伸ばして駆けて行く。

「お、かあしゃま！」

「ああ、危ないわ」

私の手を離し、頭の重さに引っ張られつつ、トトトツと走って行ったリーン。

母様にぶつかると、膝の上にトンツと乗せられて、ポリウムたつぷりなお胸に、ぎゅつと抱き着いた。

母様は「リーンったら〜」なんて言いながら、愛おしそうに優しく頭をゆつくりと撫でている。

フツと目を細めると、リーンの体から白い光が出ているのが見える。

その白い光は、母様を包むように輝いているの。

私の瞳には人の魔力を見る事が出来る、『魔力視』と言われる力が宿っている。

ただ、力は弱い方なので、少し集中しないと見えないのだけれど。

リーンは今、多分治癒魔法を使って母様を癒しているんだわ。

何故「多分」なのかと言うと、リーン本人に魔法を使っている自覚が無いからよ。

無自覚で、無意識に母様を癒している。

初めてそれを見たのは、リーンが生まれた時ね。

ぐったりとしていた母様に、父様がリーンを抱かせた瞬間、リーンの体から出た白い光が、母様を包んだの。

暫くしたら、母様が元気になった！

何故か分からないけど……私はリーンがしてくれたんだと感じたの。

だから私は、リーンが使うそれを治癒魔法だと思う事にしたわ。

私の弟は、将来が楽しみなくらい優秀な魔法使いさんみたい。

母様に抱かれてウトウトとし始めたリーンを見ていたら、ふと母様と目が合った。

それから、二人でクスクスと笑い合う。

今は元気な母様だけれども、リーンが生まれてくるまでは、体が弱かったの。

私は母様の体が心配で、教会でよく神様にお祈りしていた。

だから、きつと神様が私の祈りに答える為に、リーンに『癒しの力』をくれたんだわ！

本当にありがとう、リーン。

私の天使な弟さん。

幸せそうな顔をして寝ている弟と、柔らかに微笑み弟を抱っこする母様。それを見る、私。

この時間が生涯で一番の宝物になる気がするわ。
幼子の時間は、あつという間なんですもの。
今の幸せな時間を、神に感謝します。

十

僕の名前は、リーンオルゴット・ルーナ・アルペスピア。

「リーン」だと思っていたけど、正しくは「リーンオルゴット」だ。

さて、兄様や姉様のお陰で、家族の事が段々分かってきた。

父様はアルペスピア王国国王の息子。つまり、国王様は僕のお爺様。

そんな家系に生まれました。

血筋の事は、最近までよく分からなかったんだけど、自分が「それなりのお金持ちの、お坊ちゃま」だって事には気付いていた。

だって、広い家にメイドさんが沢山いるし、僕の事を「坊っちゃん」と呼ぶんだもの。
嫌でも理解するよね。

家具も高そうな物ばかりだし、ベッドも天蓋付きで、お布団はフワフワ。床にもモコモコとした絨毯が敷かれてる。

お爺様は国王様だからお城に居るんだけど、僕を含む父様の一家は城には住んでいない。

父様が領主を務める土地に暮らしている。

王族の中では、一番王城に近い領地なんだって。

僕の父様は、アルフォンス・ルーナ・アルペスピア。

後ろで一つに纏めた金髪に、グリーンの瞳。顔は俳優みたいに整っていて格好いい。

母様は、レイルス・ルーナ・アルペスピア。

とても美人で、僕も大好きだ。

銀髪で黄色の瞳。体が弱いけど、子供を三人も産んでいる。

産む度に弱っていく母様に、父様もハラハラしたらしい。

兄様は、レーモンド・ルーナ・アルペスピア。

父様と同じ、金髪でグリーンの瞳。頭も良くて、顔も父様に似て整ってる。

優しいのだけれど、僕の事を好き過ぎるのが玉に瑕。

僕と居ると、時々びつくりするくらい顔が崩れるの！

でも、笑顔が綺麗で優しいし、その声は心地よい高さで、聞いていると落ち着く。

姉様は、ヴァイラ・ルーナ・アルペスピア。

淡い栗色の髪の毛に、兄様よりも深い色のグリーンの瞳。

たまにその瞳の色が、光の加減か何かで、茶色く見える時がある。

兄様に少し冷たいけど、僕には優しく、とても愛に溢れた人だ。

母様のお手伝いなどをよくして、母様もそれを喜んでいて。

勉強は少し苦手みたいだ。

でもきつとゆつくりと勉強してるだけで、やれば出来る姉様だと思うんだあ。

ちなみに、僕等一家のミドルネームである「ルーナ」というのは「住んでいる領地の名前」なんだ。

国王様から領地を任された時に授かるから、親が領主だという事は、名前で分かる。

さて、以前は混乱する事もあったけど、僕はようやくこの世界の事、僕の前世の事を区別して理解出来るようになってきた。

前世では日本で結構長生きしたらしい。一日一善を心掛けていた。

だから困っている人とかを見ると、どうしても助けたくなくなっちゃって、そのせいで「偽善者」と言われていたみたいだ。

前世での僕は、大人になっても近所の子供達とゲームをしたり、漫画やアニメも教えて貰ったりしていたらしい。子供と遊んでいたくらいだから、ちよつと子供っぽい人だったんじゃないかと思う。

僕が異世界であるここに転生した事をすんなり理解出来たのは、子供から借りた本の中に、異世界へ転生、転移する話があつて、何となく覚えていたからだろう。

今思い出せるのはこのくらいだ。前世の記憶は、以前よりははっきりしてきたので、時間が経てばもっと思い出せるのかもしれない。

前世と今を落着いて区別出来るようになったのは、異世界に転生する本の記憶をしつかり思い

出してから。

そして記憶が戻った中で一番驚いたのは、死んだ後に『神様』に会っていた事。

暖かい場所に向かったら、そこには神様が居た。

神様は僕を包み込んで、「愛し子よ……いつてらっしゃい」と言ってくれたんだ。

まあ、これを思い出したのも最近なんだけど。

素敵な家族の元に転生したんだから、この先の人生を楽しまなければ、勿体無いと思ってる。

神様に会ったといつても、「世界を救え」とか使命を負わされた訳じゃないし、特に何も無かったから、好きに生きてても良いんだと勝手に解釈した。

まずは……勉強かな？

まだ上手く喋れないんだもんなあ。

聞けば理解は出来るんだけど、言葉に出来なくてモヤモヤするの。

悲しいです……しくしく……

父様の書庫しよこに入り、そつと書物を手に取る。

前世の知識は多少あつても、ちゃんとこの世界の事を知らないぞ！

喋れないけど、読み書きはもう出来る。だから今この手にある本、『賢王の偉業いぎょう』もタイトルから読めた。

僕はパラパラと頁めくを捲り、文字を読んでいく。

そこにはこの国の歴史と、賢王が行った偉業が書かれていた。
最初は歴史からだ。

太古、この世界の大陸は三つに分かれていて、人族の他にビースト族、エルフ族、ドワーフ族、
魔族が大陸中に居た……って――

「まじよく!？」

驚いて声を出してしまったが、ちゃんとは言えなかった。

魔族かぁ……魔族ってあの魔族なのかなぁ？

頂点には魔王が居るとか？ ……ファ、ファンタジーだなあ！

あはは。

「ふう」

心を落ち着かせて、続きに目を走らせる。

先程の五つの種族に関する事が書かれていた。

「ふむふむ」

理解出来たのは、次の内容だ。

ビースト族とは、つまり獣人達の事。身体能力が高く、手先が器用な種族。魔力の強さは個体によつて異なる。

エルフ族は大体、地球のファンタジー作品の定番通りだった。

長命で、精霊魔法（風と水）が得意。人見知りしがちで、魔力が強いらしい。



ドワーフ族も定番の通りだった。

長命で精霊魔法（火と土）が得意。鍛冶^{かじ}錬金術^{れんきんじゆつ}を使用する。

魔力の強さは個体によって違うが、年を重ねた者程魔力は強い。

そして最後に魔族だ。

上級魔法と錬金術で薬を作る事得意とし、魔力は強い。

魔族の中でも種族が分かれていて、その種により短命長命の差がある。

特に「危険だ」とも書かれていないし、魔族って意外と身近な存在なのかなあ？

薬を作るって事は、薬師さんに魔族が多いとか？

勇者や魔王は、この世界には居ないのかな？

さらに読み進めると、賢王が基盤を作ったと言われる、異世界ものでお馴染^{なじ}みの【ギルド】についての記述があった。その種類は商業ギルド、薬師ギルド、冒険者ギルドの三つだ。

今もこのギルドはあるらしく、取り決めなどが細々と書かれていた。

大きくなったら僕も、冒険者ギルドとかに行ってみたいなあー！

転生して冒険者としてギルドに登録するっていう、テンプレな事ってしたくなるよね！ なんだかワクワクするなあ。

「リーン？」

「？」

後ろから突然声をかけられて、体がビクンってなった。

この声は……

「としま」

その人は僕を抱っこすると、顔をじつと見詰めてからふんわりと微笑む。

間違いない、僕の父様だ。

父様は「ここに絵本はないぞ？」なんて言いながら、僕が散らかした書物をササッと片付けてしまった。

もう少し読みたかったのになあ。

そろそろ夕食の時間らしく、僕を呼びに部屋へ行ったが見当たらず、戻り途中でこの書庫の扉が開いているのを見付けて閉めに来たようだ。父様の独り言でそれが分かった。

結局僕は、父様に回収されてしまった！

後ろ髪を引かれる思いで、父様と一緒に部屋を後にする。

またあの本を探すところからしないとだよ。

トホホ……

その後も僕は、書庫へちよくちよく足を運んだ。この書庫なんだけど、父様や兄様が持ち出しているせいののか、置いてある書物は少ない。

本棚二個分くらいしか残ってないから、この書物だけでは知識^{かたよ}に偏りがでそう。兄様の趣味なのか、賢王に関しての書物が多いように感じた。

僕は目当ての書物を手に取り、自分の部屋に戻る。
僕には広い部屋が二つ与えられている。寝室と、勉強部屋だ。
部屋の作りは、入ってすぐのところに寝室があり、その奥に勉強部屋。本棚も勉強部屋の方にある。

本棚って言っても、書庫の本棚よりは小さいけど。
持ってきた本を机に置き、椅子の上にクッションを敷いて座る。

このクッションが無いと、僕は机の上の物が見えないのだ。

むむむ、言葉や習慣の違いには慣れてきたけど、この小ささにはなかなか馴染めない。前世の記憶が少しずつ戻ってきているから余計に違和感がある。

三歳の僕の視線は低いし、頭は重いし、不便だ！……やるせないっ！

ふんふんと鼻息を荒くしつつ、持ってきた書物を広げた。

タイトルは『祈りと魔法』。

ずっと気になっていた魔法書を見つけたんだ。この世界に魔法があるからだと思うんだけど、書庫には魔法関係の本も多かった。

この前は初級学校や中級学校の教科書とか、世界について書かれた本を読んだ。これは、兄様が学校で使った物だと思う。

この世界の事を色々と知れたし、理解出来るところも沢山あった。

よく分からなかった事は、父様が兄様に今後聞くとして——次は魔法だよ！ 魔法！

僕はワクワクしながら書物を捲っていく。

「……？」

ペラペラと捲り「うーん」と首を傾げる。また、ペラペラと捲って首を捻る。

この、「魔法は祈りを代償として使う」って記述に疑問が浮かぶ。

祈りを代償って、どゆこと!?

魔法ってMP的な……マジックポイントみたいなものを使うんじゃないの？

そこまで考えて、僕はハツとした。

そして両手を見て、心の中で「鑑定」と唱えてみる。

マジックポイントで思い出したんだけど、まだ試していない異世界テンプレがあるじゃないか！

まずは自分を「鑑定」出来るのか、確かめてみないと。そうしたら、マジックポイントが存在するかどうかも分かるはずだ。

鑑定と唱えてから数秒後、手の辺りに薄い板のような物が現れた。

名前…リーンオルゴット（リーン）

種族…ヒューマン（人族）

年齢…三歳

職業…????

レベル…???
状態…健康

生命力…???

魔力…???

祈り…???

力…???

俊敏…???

体力…???

器用…???

知力…???

スキル…???

祝福…???

称号…神に愛された子（隠匿）

「!?」

鑑定は出来たみたいなんだけど。生命力とかの欄について「？」はなあに？

弱いつて事ならともかく、何だこれ!! 僕の中にある知識と、ちつがああう!
いや、分かるのもあるけど……

あ、「祈り」があつた。あつちやつた……そそそ、それに……

僕はゴクリと唾を呑み込む。

称号という欄に、じつと視線を送る。

この称号は、なんだああああ!!

ドキドキと心臓の鼓動が速まる。「神に愛された子」ってどゆこと!?

未知の言葉に、頭の中がはてなマークで埋め尽くされる。

落ちていて考えたいけど、鑑定結果が目に入るとソワソワして仕方ない。

とりあえず、鑑定結果を消そう。

「解除」と唱えれば消えるのか、視線を外したら解除されるのか……

僕が視線を手から外すと、薄い膜のような板は見えなくなった。

やっぱり視線を対象——今回は僕の体——に固定している間は、鑑定が続いた状態になるのか。

少し頭の中が落ちていて、心臓の鼓動も元通りになった。

……見間違ひかなあ？

見ちゃダメなモノだった気がするが、でも異世界テンプレである鑑定は、転生したら普通はするんじゃないかな？ うん、僕は悪くない。

気が付いたら自分のかいた汗で、着ている服がしっとりとしていた。

それ程に慌てていたのか、僕は。

「ふう〜」

静かな部屋の中で、自分の吐いた溜め息が響く。

サツと頭を切り替えて、寧ろ見なかった事にして、机の上の書物をまた捲っていく。

魔法の中には生活魔法と呼ばれるものがあつた。この世界では、魔法は日常的に使用されていて、どうやらこの生活魔法というのは、殆どの人が使えるものらしい。この魔法で掃除や洗濯、料理が楽に出来るようだ。

それにはこの世界に根付いている「祈り」が関係している。生活魔法は祈る事で発動出来るのだ。初級魔法から中級魔法は、生活魔法と余り変わらない。これにも祈りが使用されるようだ。

例えば「火」を扱う魔法だと、祈りや魔力の消費が少ない魔法『ライト』は初級、やや威力の大きい『ファイヤーボール』は中級……のように段階づけされている。

だが上級魔法だけは祈りが適用されず、使い手の魔力のみを消費すると書かれていた。

その他には、召喚魔法や精霊魔法、錬金術や時空間魔法もあつた。

詠唱や使用頻度なども、魔法名と共に載っている。

「しゅりゅいおーくなあ？」

んん、言えなかった……

この世界の魔法は種類が多いなあ……それにしても、本当に「祈り」ってなあに？

兄様が教えてくれた話に、賢王を【魔法神】として崇め、魔法に祈りを込め、っていう一節が

あつたけど、その事かなあ？

それと気になるのは、僕をときめかせる「召喚魔法」だ。

召喚魔法は、魔物を召喚して従魔に出来ると書かれていた。

僕も召喚魔法を使ってみたいな。どうやってやるんだろう？

あと錬金術だよ。んはあくんなに種類があると、ワクワクするなあ！

元地球人の記憶のどれを呼び起こしても、魔法は「ゲーム」の中のものだった。そんな僕からしたら、魔法を使えるなんて夢のようだ。

本当に、この世界には魔法があるんだなあ。

その後、僕は魔法に夢中になって、すっかり鑑定の事を忘れてしまった――

+

魔法の事を知ってから暫く経つたある日。四歳になった僕は、レーモンド兄様に頭を撫でられまくっていた。

「今日は何をして遊ぼうかねえ。リーン」

「兄様、お勉強は大丈夫なのですか？」

「えっ、リーンは僕と遊びたくないの？」

「遊んでくれるのは嬉しいですけどお……」

「だよね! 『嬉しい』だなんて……ふふふ」

レーモンド兄様に捕まったのは、つい先程。僕は兄様の部屋で、されるがままになっている。今のレーモンド兄様は十五歳。学園の高等部は後三ヶ月で卒業だ。最後に卒業試験がある為、前よりも勉強している。

それに加えて、ルーナ領を運営する父様の仕事もお手伝いしていた。つまり……お忙しい方なのだ。

領主を継ぐからというだけでなく、もしかしたら……将来の国王つて事も有り得るらしい。

常日頃、ヴァイラ姉様にネチネチと叱^{しか}られてる姿を知っているだけに、とても心配だ。

兄様は僕をぎゅっと抱き締めると、スンスンと匂^かいを嗅いだり、頬をつんつんしたりしてくる。頬をつつきながら「可愛いねえ」「柔らかない頬だねえ」とブツブツ呟^{ささや}く。

整ったお顔も、ゆるゆるになって、折角のイケメンが台無しだ。

僕は以前より言葉を喋^されるようになったので、恥^はずかしい思いをする事はなくなった。

初めてきちんと喋^された時は、家族全員から「凄い!」と褒^ほめられ、沢山拍手され、恥^はずかしさと照れから、顔が熱くなったものだ。

喜んでくれる事が嬉しくて、思わず涙を流してしまい、家族の皆を慌てさせた瞬間でもあった。それ程、うまく喋^されない間は歯^は痒^{かゆ}い思いをしていたんだ。普通の子よりも時間はかかったけど、喋^さる事に慣れてきてからは急成長出来た。

「レーモンド様」

「!」

兄様を呼ぶメイドさんに、僕は視線を向ける。

どうやら兄様はお仕事があるらしく、代わりにメイドさんが僕と遊んでくれるようだ。

去^さり際に兄様は「すぐに終わらせるから! ね? ね? 僕を待っててね!」と早口で告げて、ダッシュしていった。

そんな兄様へメイドさんが、「走ると危ないですよ」と声をかける。

多分……今日はもう兄様に時間は出来ないだろう。

本当に、ここ最近忙しいし。

「リーンオルゴット様、私と遊びましょう!」

「アイラさん、いつも通りに呼んでくださいね?」

アイラさんは、生まれてからずっと傍に居る僕の専属メイドさんで、いつも遊んでくれる。なので、メイドさんの中でも一番の仲良しです。

僕を愛称の「リーン」と呼んで良いのは家族だけなのだけど、僕はアイラさんの事を家族同然だと思っているので、彼女にもそう呼んで貰っている。

でも毎回、僕の許可が出るまでは「リーンオルゴット様」と呼ぶんだ。

「ところで、アイラさんは魔法を使えますか?」

「! ……リーン様はもう魔法の事までお勉強されたのですか!?!」

その返事を聞いて、あちゃー……と、若干冷や汗が出た。